

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十七年一月廿五日印刷

第十八卷 第二號

淨土

二月號

春日 熙々 吉田絃二郎

釋尊の入涅槃 佐藤密雄

德本行者 服部英淳

淨土教は佛教でないか 眞野正順

1952

2

悲華經に曰く

近來、僧侶の長髪が目につくようになった。明治政府によつて蓄髮妻帯を許るされて以來、一方丈けは逸早く實行したもの、頭の方は何となく氣がひけてか、必要を感じぬのかお留守になつていたが、滔々たるアメリカニズムの波は諸士をして半世紀前の法令を改めて實踐せしむるの結果となつた。今世紀の奇蹟の一つである。

筆者自身學生時代長髪の陰に、わずかなるロマンを抱いて紅燈の下をさまよつたものであるが、斯る時の外は「長髪」の効果を感じなかつた。例外者たるの孤高を避けて、わづかに人間並みの凡庸に戀々たる以外でなかつた。青年の恥らいといえは甘いことではある。

爾來十數年の今日、巷に再びその姿を見る。願わくば恥多きわが青春の再現でなからんことを。せめて悲華經に説く。

「自ら剃髮するを以て出家となすに非ず。若し能く大精進をおこし、衆生一切煩惱を除かんとする。これを出家となす」

この慨ありて、佛法の大道を濶歩されんことを。徒らに頭の先のみに現代を象徵するのみでなく、その人格に於いて、教養に於いて、リーゼント・スタイルたらんことを。

目次

春日熙々……………吉田絃二郎(1)

哲學の小みち……………佐藤賢順(26)

きさらぎの寢釋迦……………小島章見(21)

釋尊の入涅槃……………佐藤密雄(14)

私と佛教……………ブリンクリー(28)

徳本行者……………服部英淳(23)

「淨土」有縁の人々……………藤井實應(18)

川田熊太郎博士訪問……………編集部(12)

芝園だより

淨土教は佛教でないか……………眞野正順(5)

―淨土信仰の本質(三)―



春日熙々

吉田 絃二郎

春が來たと思つたばかりでもわたくしたちのこゝろははずむ。武藏野に立てば遠い山々はまだ寒々と雪をたゞへてゐるが、一日一日と近づいて來る春の感觸を覺える。

日本人にとつて春といふ言葉ほど強い新鮮な魅惑を持つてゐるものはないであらう。春は光りであり、生命であり、よみがへりである。

春は新らしい年を意味し、新らしい人生の出發を意味してゐる。かういふ意味で、春を迎へるとともに、新らしい年齢を一つ重ねてゆくといふ日本在來の年齢の算へ方はなつかしい。日本中の人、一人残らず春とともに同じやうに齡を重ねるといふよろこびは捨てがたい。

西洋式の年齢の算へ方はあまりに、人生を小さくきざみ過ぎてゐる。一生の長短をはかるに幾十幾日と小刻みなばかり方をしないで、幾つの春を迎へたかとするのが東洋的であり、日本的である。いかにもおほやかな感じがする。

「何の善根も積まぬ身の、また一つ春を重ねさせていたゞいた」といふ感恩の念をこめるところに東洋的な年齢の算へ方のよさがある。

人は誰れしも命の長からんことを欲するにちがいないが、それは健康にめぐまれ、家庭生活にめぐまれた人の場合である。老いて孤獨にして憾軻不遇、或ひは病に苦しむ人にとつては、かならずしも、さうでない場合もあり得る。

ミケランゼロは十四の病を持つてゐた。九十歳のかれは「眠ることはうれしい。しかし石となることは、さらにうれしい」と言つてゐる。悲痛な大天才の叫びである。

かれは老いて病に苦しみつゝも働かなければならなかつた。そしてかれが贏ち得た金銭は、貪慾無耻な甥たちのために浪費されてしまつた。

かれはむしろ石とならんことをねがひつゝ九十年の孤獨の生活を力づよく生きた。

健康で家庭的にめぐまれた人の春よ祝福されてあれ。しかしながら、世には病みてミケランゼロに似た歎きをくりかへしつゝある人のあることを忘れてはならぬ。

春が來た。健康な幸福な人々の上に春が來た。

若い人たちは口笛を吹いて、窓の外を歩いてゆく。

しかし病室の窓のなかに、その口笛を聽いてゐる病人があることには氣付かない。

わたくしもかつて亡妻を病院に入れた日までは、そこに生死の境になやむたくさんな不幸な人々があらう

ことに氣付かなかつた。

否、病室にはいつて病人を見てゐる若い醫師や看護婦たちまでが眼前の生死の相を忘れてゐる。

一日に一度院長の廻診があり、その廻診には見習ひの若い數人の醫師たちがどやどやと病室にはいつて來て、院長の診察振りを見學する。

わたくしの妻の場合にわたくしは悲しい經驗をしたことを忘れ得ない。

妻にとつてはその日の院長の診察は生死の問題であつた。そこに立ち會つたわたくしは全身の神經をかき立て、院長の末端の表情まで掬み取らうとしてゐた。

その刹那であつた。わたくしは若い見習の醫師があくびをしたのを見た。わたくしは今日なほその若い醫師のあくびを忘れ得ない。

だが、すべての人間は、生死の相を目前に見ながらあくびをしてゐるのだ。

春が來た。

病院の窓際にはチューリップやヒヤシンスやスギトビーの美しい花がかざられてある。

街を歩く人々は、ふと、窓際の美しい花を見つけて

口笛を吹き度く思ふかも知れない。しかし口笛を吹く前に、もう一度靜かに病院の窓を見直ほすがいい。

そこには病める幼兒の寝顔に溜息をつく若い母もあるであらう。そこには一人子の臨終に身を悶へる老父もあるであらう。

春が來た。美しい花がかざられた。しかし窓際の花にはまだ寒い北の風が吹いてゐる。

遠い過去を振りかへつて見ると「人生とは何であるか？」といふ問題が今更のごとく頭をもたげて來る。

何のために生まれて來たのであらう？ この疑問は永遠の疑問として残るであらう。

たゞこれだけのことはいへる。「人生はすべて過去となり、過去となる時すべて悲しく、寂しい。」「だからわたくしは人生に生まれ來たことをありがたく思ひ一日でも長く生きて人生の悲しみと寂しさを味つてゆきたい。その悲しみと寂しさに、わたくしが耐へられなくなつた時わたくしは靜かに一切をあなたまかせにして、人生に別れを告げるであらう」

一枚の木の葉は地に落ち、地に朽ちて、大地の懷に入つてはじめて新らしい生命を得て、春が來れば美しい芽となり、花となる。

百數十年前に印度にコビールといふ詩人があつた。大正のころ日本を訪ねたタゴールはコビールの詩を譯してゐる。

コビールは貧しい鑄掛職をして生涯を終つた詩人で聖徒のやうな生活を送つた。そしてかれが死んだ時、かれはさびしい墓場に葬られたが、その翌日コビールの墓に詣でた人たちは一つの奇蹟を見て驚いた。

コビールの墓を掩ふて一面の花が咲いてゐた。

コビールの屍からは馥郁たる美花が薫つてゐたのであつた。

人間は死ぬることによつて、さらに高い、さらに美しい世界によみがへるであらう。

わたくしは去年は數人の舊い友人を失つた。

N氏もその一人であつた。N氏はわたくしの先輩で今の世にはめづらしい廉直の士であつた。氏は長い官吏生活を送つたが趣味のゆたかな人で、わたくしは歌舞伎や能樂に度々誘はれた。不幸にして五人の愛子た

ちに先立たれ、令夫人と二人だけで寂しい晩年を送つた。殊にお氣の毒であつたのは最後に残つた二人のお子達は、一週間の内に相ついで突然歿せられたといふ悲惨なことであつた。わたくしはN氏のやうな正しい人が何故にこんないたましい目を見なければならないのであらうかと天を疑ひたくなることがある。さてそれはそれとしてN氏は過去四十年のわたくしとの親しい交りの間にも、かつて一度も宗教上の話など取り交はしたこともなく、令夫人は英文學に嗜み深い方であり、わたくしはN氏夫妻は合理主義者であらうと考へてゐた。

ところが、つい、このごろ未亡人からの消息がありそれには次ぎのやうなことが書いてあつた。

「主人は病中、臨終の最後までお念佛を申しつゞけてをりましたので、私もこのごろは日夜お念佛を申し、佛さまのお迎へを、靜かに待つてをります」

この未亡人の手紙はわたくしの心に強く迫り來るものがあつた。

いつも哲人のごとく、冷靜沈痛な眼を瞠つてゐたN氏が最後までお念佛を申した姿は尊いものであつたら

う。さらに五人のお子達と御主人に先立たれ、たゞ一人お念佛申さるゝ未亡人の姿を想像する時、人生の厳しさと尊さを感じないではをられない。

春が來た。梅の花もほころびはじめた。建康な人たちは幸福な春の日を樂しむがよい。

しかしまだ雪深い北の國では病床に、かすかな雪解の音を聽いてゐる人もあらう。

またこの大都會の病院に美しいヒヤシンスの花を見入つてゐる人たちも多いであらう。

それらの不幸な人たちの上に今年はよき年であるやうに。

人は往きて我は残る。これありとやせん、あらずとやせん。かたち去りて名はとゞま
る。彼は夢か夢にあらさるか。

(解脱上人愚道發心集)

淨土教は佛教ではないか

——淨土信仰の本質(三)——

眞野正順

(一)

病氣勝のため、本講も何かと中斷致しまして、誠に申譯けないこととであります。

さて之からお話は佛の滅後に入つてゆくのでありますが、このへんで、少し釋尊と大乘佛教、ことに淨土教との關係を申上げておきたいと思ひます。と申しますのは、最も古い釋尊の言行録として傳へられております阿含ニカーヤと後の大乘佛教との間には、明かな相違がありまして、ただその經典の成立の新古というだけでなく、

その内容に於ても大分異つた所があります。そこで眞の釋尊の教説は、その成立の早い阿含などの原始佛教だけであつて、後の多くの大乘佛教は、嚴密に云つて佛説ではない。従つて、その大乘佛教の宗教的中樞をなしております淨土教は、釋尊の設いたものでもなければ、本旨でもない、という考があるのであります。こういう考

えは、ずいぶん古い頃から、佛教の歴史の中に絶えず存しておるのであります。近頃は殊に一部に言いはやされて、これが、とかく淨土信仰の門口にある一つの躓きの石となつておるのであります。それで、まづこの問題を判明させておく必要があります。

しかし、この問題を本當に取扱う事になりますと、とても簡単には申し上げられないのであります。今回は確かな史實を基としてごく概略だけ申上げておきましょう。

(二)

諸傳の一致して傳える所によりますと、釋尊が伽耶の菩提樹下に於て大悟せられた時、その悟られた境地が余りにも高遠なため、之をすぐ人に説いても、おそらく何者も理解しがたいであろうと深く思ひ煩はれたとでております。これは、いかにも尤もなことでありまして、説いて説きがたく、示して示しがたいのが宗教的體驗の特

色でありますから、更に稀有なる大聖の深い體驗の境地として、誠によく領かれ得る所であります。そこで佛傳には空中に惡魔が現はれて説法の斷念を勧めたとか、或は梵天が姿を現はして説法を懇請したとかいろ／＼と傳説されていますが、いかにもよく其時の釋尊の懊惱躊躇の心中を現しております。そして遂に説法の決意を固め、その説き難きものをいかに説き現はすかについての方法を見出すために直ちに深い冥想に沈まれ、幾七日かを過したのち、やがて一つの方法を考へつかれ、初めて説法の道に上られた、と傳へております。そして、その時考へつかれた説示の仕方こそ、後に四諦・十二因縁などと整理せられて阿含の中に残り、所謂原始佛教の骨子をなすものである事は疑をいれません。

しかしここでよく注意しておかねばならぬ點は、この四諦十二因縁などは、こういう成立の事情から申して、決して釋尊の大悟の内容そのものを表はしているものでなく、その説かんとして説き難き體驗内容を一般に頌ち與へるべく工夫をこらされた説示の手段であつた事であります。人々が、この道に沿ふて釋尊の内證に近づいていく通り路でありまして、決して悟りそのものではない。ところが後世になりますと、一部の癡り固つた佛教徒は、この教説を重んずるあまり、十二因縁などを以て直ちに釋尊自らの悟つてゆかれた道行を現し内容そのものを現はすといふやうな考になつたものさへあ

ります。之はつまり、手段と目的との混同であります。

さて、四諦十二因縁は、流石がに古今に輝く立派な教説であります。しかし、何と申せ、この大悟の直後、ごく短い期間に考へつかれた説示の方法が果してよく、かの幽玄きわまりなき大悟の内容を完全に示し得るものであつたかどうか、もとより釋尊は稀有の天分を具へられていた方ではありますが、ともかく、佛傳によれば、その大悟に至るまでの悉達多太子はその冥想の生活をおうむね深宮と山林の中に過され、社會的經驗は未だ淺かつたとせねばなりません。かゝる際、考へ出された説示の構格が果して十全であつたかどうか、少くとも其後四十年に亘る廣大なる教化の生活を通じてさまざまの數奇なる運命に遭遇せられた釋尊として、常に満足すべきものであつたかどうか。從來佛傳の作者は、釋尊の超絶的天分を尊崇する余りこの悟後幾七日かの冥想によつて佛陀生涯の教化の大綱は動きなく決定され些の修正もなかつたとするのでありますが、果してそうであつたでせうか。もとより此時の輝く大悟の内容そのものは我等の仰ぎてやまぬ永遠不磨のものでありますが、しかし、それを擔ふておる人間釋尊には、やはり生ける人間としての成長があり變化があり、社會教化の御經驗の豊富を加へると共により深き成熟に向はれつつあつたと見るのが自然ではないでせうか。そしてその成熟に應じて、その大悟説示の仕方にも一つの生長があつたと見る

べきではないでせうか。

この事情が、はしなくも鮮かに佛傳の上に浮び上つて來たのは、釋尊の入滅直後の事件でありました。諸傳の一致して傳へる所によりますと、入滅に愕いた弟子等は、ただちに王舍城に集つて偉大なる師の教説を編纂するために第一回の結集を開いたとせられております。これは實に後世の佛教の方向を決定する重要な會議でありましたが、史傳する所、多くの佛弟子の中から、たゞ長老上座の一部のみ選ばれて之に當り大多數のもの——即ち「大衆」は之から退けられ——甚しきは王舍城に近寄るのさへ許されなかつたと傳へられております。かくてでき上つたものが、後世の阿含ニカーヤなど、ゆわゆる原始佛教の骨子をなすものであるは申すまでもありません。

しかし、この編纂には、もとより不満がありました。その場から擯斥せられた大衆は云ふまでもなく、偉大なる說法者として傳へられる富樓那もその不満を明瞭に吐露したと記録されております。

(7)
この史實は極めて注目すべきものであります。この時の上座長老とは何を指すのでありましょうか。その名の示す如く入團以後久しき長老を指すのでありますが、そのことは、直ちに彼等が佛陀の初期の教説により養はれ、それによつて佛教を理解せるものなる事を示してあります。之に對する法臘若き大衆等は明かに釋尊後期の説

法によつて、その信念を固めておるものである事は疑を容れません。佛陀御生涯の説法の推移は、はからずも滅後、その弟子等の思想對立の姿によつて鮮かに浮び上つてきたのであります。

(三)

この事實を跡づけるものは、即ち兩者の傳へる教説に於ける顯著なる差異であります。前者即ち上座部等の傳へる佛教は如何にもかゝる場合の初期思想に見られる共通性格のやうに、釋尊體驗の特徴を他と異別して強く表現するための理性的性格を濃く帯びておりますが、其だけに適はしく、他と異別して、自己の特長を顯はすに急がしく、きわめて清潔なる理性的性格を強く現はしておりますが、それだけ、觀念的形式的におちいる憾みなきにあらず、肝心の示さんとする大悟涅槃の境地にいたつては、かへつて空漠たるを免れません。こういうところは、いかにも少壯釋尊らしい思想性格を感じしめるのであります。それゆえ、初期思想におきましては、その努力にも關らず、不可説なる大悟の内容を説くに、充分なる成功を示したとは申されず、それゆえ釋尊といふ生きた御手本を前におかずたゞこの教説だけに従つて求めて参りますと、涅槃の説明空疎たるに應じて、やゝもすれば虛無主義的に陥らんとし、單なる觀念的形式的なる現象分析に終始するか、あるいは、經典に點綴する實踐的

聖句にとり纏つた道德教となる、といふ、だん／＼後世の小乗佛教が示してくる缺陷へと墮ちてゆくのであります。

これに對し、後期思想と目せらるゝ大衆部の傳持するところは、釋尊の御經驗の圓熟に應じて、はるかに内容の豐醇を加へ、その觀念的な説明様式よりも、むしろ、胸に溢るゝ涅槃體驗の内容を、そのまゝジカに、大衆の胸に打ちつけて傳へてゆく。そうして、この現實の千差萬別なる人間生活の中に、たゞちに大悟理想の生ける活躍を求めゝ——そのため、妨げなきかぎり、印度在來の思想傳説まで取入れ、自在に驅使して之を表現しておるのが見られるのであります。つまり、こゝに於ては、大悟内容は剝き出しのまゝの積極的な表現が見られ、いかにも、釋尊教化の圓熟を語つておるのであります。この積極的な佛教は、それだけうつかりすると、佛教を他教と混同せしめる危險を感じしめるものでありますが、この後、よく印度の國境を突破して、廣くアジア幾億の生靈を救ひ、その精神的樞軸となつて、釋尊出世の懷を遂げつゝある大乘佛教は、實にこの傳説をつぐものであり、淨土教は、その宗教的中樞を構成するものである事は、言を要しませぬ。

(四)

ところで、釋尊の御教を傳へる經典のことではありますが、正直に

申しますと、後世考へるように、釋尊の御話をそのまゝ丸寫しにしたという譯ではありません。二千五百年の昔、御側に録音器を備へつけておいたわけではない。いくら記憶のいい印度人でも、釋尊のお話を片つ端から一句ものこさず暗記できるものではありません。印度人は暗記が上手だということも、實は吠陀なぞ永い間かゝつて暗記し易いやうに構成されたものを、幼少から永い間かゝつて繰返し暗記したことを云ふので、その場の話をすぐさま丸飲みにして忘れないというやうな異常な記憶能力を具へていた譯ではないのであります。

宗教的信念の傳達は、文書の機械的暗記とは違ひまして、たゞ、聴く者の心の琴線に深く觸れた御言葉だけが、深く心に刻み込まれて離れない。それを其の後、長い間噛みしめ、玩味して、御教の意味を知ろうとする。つまり、宗教の理解は、師の體驗と弟子の體驗との接觸でありまして、わが體驗に味ひ得る程度だけしか、師の教を把みとすることは出来ない。釋尊と弟子との關係もその様でありまして、かくて、こゝに多くの聽法者によつて把まれた珠玉のやうな御言葉の斷片が得られる。これがやがて後世の經典の骨子となつてゆくものであります。その以後、佛弟子から其弟子へと傳へられてゆく場合も同様でありまして、師は、自分が深く印象した佛語を、自分の體驗によつて其意味を解き明しつゝ、その弟子に傳へる。そ

の弟子にまた、我が體驗を通じて之を弟子に傳へる。こう云ふ風にすべて各の體驗を瀆過して傳へてゆく事は、宗教の傳達として避ける事ができない運命なのであります。

こうした譯で、代々の弟子等は、佛説をその眞髓のまゝ謬なく傳へやうと一生懸命になつておりながら、外形の上では佛陀の御言葉は、だんくゝと巨きくなり、様子も異つてくるのは是非ありません。つまり、佛語の「増廣」が行はれてくるのであります。

こうして、或る時期に達しますと、その構成が一先づ形を整へ、經典が編纂されるといふ事になりますが、この場合一寸注意しておきます事は、さきに申した佛語の「増廣」の外に「刪除」といふことも併せて行はれたといふ事でもあります。と申しますのは、佛教に對しある一派の見解が固まりその教團が出来て参りますと、傳へられた佛語の中に自分達の狭い見解に都合の悪いものが出来てくる。すると自分の見解の狭いことは棚にあげて、これは本當の佛の眞髓ぢやない(未了義)なぞと云ひ出し、だんくゝこれを聖典から「刪除」してゆく。こういう事は、滅後、部派佛教の争ひの中に屢々出て來る問題であります。こうして、諸派の傳承するところは、だんくゝと偏つてゆき、一派の傳へる經典には、他方の要素は全然無いということが出来、極端になりますと、その一方だけを見ていると、他方はまるで佛教ではないかの様に錯覺されてくる程であります。

す。それ故、一派の經典だけを基として決めてかゝることは、非常に危険なことゝなるのであります。

さて、この様にして經典は編纂されて來ましたが、さきの二流の中、上座の方は、その成立の性質上早くその教團組織を整備する事ができましたので、編纂事業もすゝみ、この方の經典が早く現はれることになりました。これに對し、大衆部の方は、何しろ一般大衆の中に散ばつておりますので、その統制も晩く、經典の編纂もずつと遅れたのは是非ありませんでした。

それゆゑ、聖典と申しましても、釋尊の御言葉をそのまゝ丸寫しにしたものは、兩派を通じて一つもなく、すべて滅後の構成にかゝるものでありましてその最も古いものでも、滅後百年以前に溯ることはできないと、學者は示しております。したがつて、その編纂成立の時期が少し早いから本物。遅れたからそれは、後世の偽作という譯には参りません。むしろ、眞理は中道に、阿含と大乘諸經とは共に佛陀の内證を傳へるものとして兩者よく、睨み合せ、睨み合せた上でこそ、佛陀の眞意は汲取られる事と存じます。

(五)

佛教の發展は、これを樞の實の成長に譬へられまじやう。樞の實が地に落ち、土の中で割れて、一本の芽となつて現はれてくる。こ

の芽には、もはや、さきの實の面影は少しもありません。しかし、種子が生きたためには、どうしても、自ら碎けて、この芽と成らねばなりません。かくて芽はさらに成長して一本の樫となる。芽と樫とは、その形も性質も全く異つておりますが、その生命は同じであります。芽はどうしても樫に成らねばなりません。かくて、次第に成長して、遂に空を蔽ふ大樹となる。この時、大樹の何處をけづつても、芽や種子の跡を探することは不可能です。また、種子をいくら検微鏡でしらべても、この鬱蒼たる大樹の姿は映つて來ません。しかし、種子が、眞にその生命の目的を達するためには、どうしてもこの大樹とならねばなりません。

佛教も、また、その通りであります。釋尊の播かれた御教の種子も、それが、博く人類全體のものとなり、さまざまの歴史を通して傳播されてゆくためには、どうしても、舊の姿を捨て、幹となり枝となつて行かねばなりません。

それに、外觀でこそ、原始のものとは違つて來ていますが、一貫せる宗教的生命の止むに止まれぬ必然的展開でありまして、かくてこそ、世界最大の宗教となつて、數知れぬ萬國の生靈を救ふことができたのであります。

しかるに近頃になりますと、この原始阿含だけを取上げて、眞の釋尊の佛教と見なし、他の大乘佛教などは、すべて後世の偽作とし

て排斥する主張があります。これは、譬へば、樫の大樹を切り倒して、根方に古い種子を探すと申しましたやうか、それによつて、眞の生ける佛教は決して得られないのであります。

それは二つの實害を佛教に與へるだけであります。その第一は、東洋文化の淵藪たる大乘佛教をして、教主釋尊より切離して「親なき孤兒」たらしめ、それによつて、永い歴史を通して我等の生活文化に滲み入り、その内から支え來つたところの生ける佛教は、佛教ならぬものとして打捨てられるでありましょう。第二に、かくて殘された原始佛教はと申しますと、その名こそ美しけれ、手に取つて見れば、實はその内容は、平板なる倫理説語に過ぎず、おそらく、釋尊の名によつて千古の大聖を期待して近づいた人は、そこに單調なる一道學者の姿を見出して失望し、間もなく之を捨て去るでありましたやう。事實、古來この部面だけの佛教では、文化の低い南方諸域を除いて東洋諸國に採用せられる事は嘗てなかつたのであります。すなわち、これは生ける大いなる有機體である佛教を寸斷して價値なき斷片とするもの、佛教をその内部より傷け害なうものと申さねばなりません。

(六)

以上のような事情は、佛教に限らず、あらゆる世界の大宗教に共

通な事柄であります。

基督教の聖典、バイブルは、その半ばは、パウロの書簡で充てゝあります。このパウロという人は、基督から一度も教を受けたことが無いどころか、始終、反対し続け、基督死後になつても、執念深く迫害をつづけた人であります。ところがダマスコへの道で突然基督の幻影を感じ、それから熱心なる信者となつたのでありまして、現實の上では兩者の間は截然と切斷されており、嚴密に立つて、キリストの弟子ではなく、その思想信仰においても、兩者の間に明らかなる差異が認められます。

然るに、バイブルに於ける基督教信仰の主要なる點は、實に、このパウロにあるのであります。パウロを缺いては、バイブルの價値は恐ろしく減少し、キリスト教信仰は殆んど成立せぬと申して過言ではありませぬ。以後二千年の今日になりました、新しい信仰の源泉はパウロのロマ書によつて汲み出される。我國の内村鑑三氏がそうです。辯證法神學のバルトがそうです。このように宗教の眞髓を、その傳達の時期や外形の上で計るのは謬であります。

佛教もまたこの例に漏れたものではありません。原始阿含に珠玉の輝くが如く點綴られる大聖の言行の内容をよく解明するものは、大乘諸典であります。然もまた、醇然として濃き大乘の森に生ける眼彩を點じ、その全體に生命あらしむるものは、實に、古今に冠絶

して偉大なる釋尊八十年の完成せる信念生活であります。兩者は、互に缺いては佛教を完全し得ない。

されば、これを概括して云へば、原始阿含における佛陀の言行を解明するものは大乘佛教であり、大乘佛教の深遠なる哲理を我等が實生活中に實現し得るものは淨土教となるのであります。

ねはんえ

ほろほろ 山鳩

梢で ないたよ。

とろとろ いろり火

こん夜は 寒いよ。

爺さん 枝しば

どつさり 燃してよ。

あしたは ねはんえ

芋でも 焼こうよ。

川田熊太郎博士

を訪ねて

編 集 部

安居・眞野(龍)兩人は、或日の午後東大教授川田先生を訪れた。

二子玉川驛で下りて多摩川沿ひに東に行く事しばし、少し北に曲りこむと六郷用水に出る。その清流に榎の根を洗はせて先生の御宅がある。四圍、閑寂、遠くに家鴨の騒ぐ音が幽かに聞える。枝折戸を排して案内を乞へば斜上の紅葉が目にしみ入るやうに鮮やかであった。

「やあ、しばらく」と先生。先生は熱心な佛教の理解者であつて、前、文理大倫理學主任時代は、安居なその骨折でできた佛教研究會の支援者であり、リーダーであつた。佛教

理解のため、梵語講座まで必要となり、小生までひっぱり出される程だつた。「淨土」へは一昨年正月に玉文を下さつた。

「淨土」は頂いております。淨土といへば私は幼い時分、おやじがよく淨土三部經を讀んでいたもので、ちよい／＼あの無量壽經を見ただものですよ。勿論意味などわかりませんでしたがね。ところが、戦争中、こつ／＼と梵本で讀んでみて初めて眞の價値を發見したやうに思ひました。そして、たゞに淨土教だけの經典ではありませんね。大乘佛教全體の教から説いていますよ。」

先生は、あの天皇と佛とは、なそのくだら

ない價値論が、堂々と中央協力會議にまで上つた戦争中に、じつくりと學問に沈潜され、又、佛典を原語から研究されていたのである。サンスクリット語、チベット語は確かなものである。文理大時代の楞伽經・解深密經の講義には學生は相當この原語に惱まされたりし

い。
「全くです。あの三部經も、結局、萬卷の大藏經の中から、選らびとつた選擇といひますか、教相判釋(多くの佛の教を、宗祖の立場で整理判別すること)の點から、淨土宗のよるべきものとしたのですから、もつと廣い佛教の立場でも讀むことが必要でございませぬ。」

「そう／＼教相判釋といへば、あのやうに佛教の各祖師方が、いろ／＼苦心して、佛教一代の膨大な經論を比較整理して、我がものとすべきそれぞれの教を、はつきりと不安なく把まれた上で、自己の安心を立てられているやり方は、私の學問にも大きなヒントを與へてくれますね。私も、哲學を、せま／＼一つ所のみを考へないで、全ての比較の上で考へる事をやつて見たい、いや、やりつつあるの

ですがね。」

「聖道門、淨土門と云いまして、ただ一方は難かしくてつまらぬ、こちらの方のみがよい。彼を捨て去つて、此のみとるという簡單な考へではなくて、佛の全ての教を眞剣に生きる修行者の血みどろな努力の跡だと解すべきだと思ひます。それを忘れて安易につくといふだけの心は、今、考へなおす問題だと思ひます。」

「まあ、とにかく、あの大乘佛教の大藏經がですね。あれで幾萬、幾百萬の人が、心から、安心して、生きて來たといふ事實は、大したものですよ。佛教云々はとにかく、この事實は動かしがたいね。」

今、はやりの實存哲學のヤスパース、ハイデッガーでもですよ。彼等はニヒリストでもなければ、純キリスト者でもない、しからば何によつてゐるのかといふ事になりますかね。どうも、大乘的な考方へくるんじゃないかなと、ある人は云つていますよ。もつとも、そう簡單に、この大乘はわかりませんがね。

要するに、今の哲學思想が發展を求めて進む方向に對して佛教の教理は、大きな指導になると思ひますよ。

僕は、いつでも云ふのだがね。哲學とは何

か、フィロソフィ、つまり愛智だ。しかるに佛教は、この智を説く教が、大藏經の三分の一を占める般若經として持つておる。云ふまでもなく、般若とは智慧といふ言葉です。この點からでも、佛教はありきたりの宗教ではなくて、理性にたじろがない教だと云へませう。

ただし、私の學問それ自體としては、私が佛教の側から、學問をし、研究をするといふ事は學問の獨自性を弱くするものですから、あくまで避けて、冷靜に、えこひいきなしに哲學のメスにのせてやつております。」

キラリと眼鏡越しに鋭い理性の目が光る。なんでも、かでも、我田引水的に、ものを考へ、處理する事は、深く警しめねばならない宗教者の人格の圓滿さは尊いが、考へ方の甘さ、丸さは充分に注意せぬと、今に、たこつぼの底にくつついて安心してゐる中に漁師の獲物になるたこの不覺を取らぬとも限らない談笑盡きず、語り來り語り去る先生。

四邊漸く夕暮の幕と共に冷氣がおしよせて圍む火鉢の炭火が赤い。

ふと鹽谷贊の「赤いにじ」といふ童話を思ひ出した、昔支那の山中で、一人の老人にある少年が出會ふ。老人は、山中の岩壁の文字

を今まで、苦心に苦心を重ね、學びては讀んで來たのであるが、今は壽命盡き誰知ることもなく死なねばならぬ、お前は、私の後をついで讀んで欲しい、そのための本はある。學者は、誰に知られ、何のためになることをも考えず、ただ知らんがための努力を第一にすべきだ、いはば寂しい心とでもいへようか。

といつて後事を托して死ぬ。少年は、何十年となく讀みついで、とうとう岩壁の文字を讀みえたが、ふしぎな文字が人に讀まれたのを怒るかの如くその岩壁は突如火を發して谷間に落下し、少年も人に知られぬままに命絶えた。その赤い岩のみ今、フランスの探險隊に見つけられたが、ふしぎの文字は讀まれずに、「赤いにじ」と呼ばれてゐるといふ話。つまり、人は利益、世間態、功名心などの第二義的なものを後廻しにして、學者は學ぶ事のために、求道者は求道のために眞剣になる事が肝心である。後はすべて、おまかせであり、又ついてくるものである。この眞剣な心持が、ふと嚴肅に私を支配した。考へに考へを積んで解された博士の佛教觀なのである。「人間いかに生きべきかが、無論私の根本ですがね」といふ言葉を最後に、暮靄の道を歸つた。

釋尊の入涅槃

佐藤 密雄



一、最初の病氣

釋尊は八十才に達せられた。其年も傳道の旅をつゞけられて、ベナレスの町に到着された時に雨季が始まらうとした。印度の雨季は傳道行脚の出来ない季節であつたが、然し休みなく傳道の旅をつゞけて居る宗教家達に取つては大切な自家修養の期間でもあつたのである。釋尊は此年の雨期に孤獨な靜寂を企てられたのであるが、弟子達には各自の都會でベナレス周邊で安居する様に命じ、自身は常侍の阿難だけを伴つて竹林村に行つて安居に入られたのである。然し、安居が始まると、折悪しくも釋尊は急激な大病をなされることになつた。經典に依ると

「世尊は雨安居に入り給ひし時に、恐しき病が生じ、死に近き迄の激痛起りぬ。されど世尊は正念にして自覺し、苦を訴えずして耐え給へり」

と記述されて居る。豫期せざる病氣で、然も其れは釋尊自身にも若しや死病ではないかと感ぜしめる程の重患であつたらしく

「我れ弟子に告げずして入滅すべきにあらず、比丘衆を教訓せずして入滅すべきにあらず、我今、精進して此の病を耐え壽を止むべきである。」

として闘病されたとせられる。釋尊は成道以來不休の傳道を續けられたが、其間に病患にかゝられたと言ふ記録も傳説も存しない。恐らく八十才にして初めて、然も大病をされたのである。従つて此の病氣のもたらした衝擊は大きかつた。此病氣を轉機として、釋尊は

「我は老いて齡八十に達した。譬へば古き車が革紐の助けに依て行く如く、是の如くに阿難よ、惟ふに我は今革紐の助けに依て行く」

と述懐される様になるし、阿難は「我は世尊の病を耐え給ふを見し時、身衰へ四方は明らけく見えたり」と言ひ、又「釋尊は滅後のことを述べずには入滅さるゝことはあるまい」として、未だ遺教のないのを唯一の頼みとする心細さを感じる様になつたのである。

二、遺教

阿難は、釋尊が未だ滅後に對する遺教をなさざることを唯一の理由に、入滅近からずと心頼みをして居たが、それもはかなく、釋尊は身心が平安になると、阿難に對して、最も畏れた遺教をなされた。所謂二灯明の教である。其に依ると、釋尊は佛陀として四十五年間説くべきことは全部説き終つた。最早自分には未發表の法はない。従つて遺教として傳へる秘法も秘儀もない。すべての法は公開し公説せられて佛陀としての事業は終つたのである。滅後の佛教徒は、各自が銘々法に目覺めて行けばよい。又弟子達が一番案じて居る問題であるが、自分の死後は自分に代る教團の大導師を置く必要がない。佛教々團の支柱は人でなく法である。弟子達銘々が汝自身を灯とし、法を灯として行けば良いのである。我が説ける法こそ大導師であると告げられたのである。此が有名な自燈法燈と呼ばれる二灯明の遺教であるが、此の教へを説き終ると共に、付け加へて、「我は三月の后入滅する」と告げられたのである。此の様な重大事をたゞ一人で聞いた阿難は驚がくし、「如來は衆生の幸福の爲めに入滅すべきでない」と夢中で強く反對したのであるが、釋尊は此に對して

(15)

「生別死別は世の常である。凡そ生じたるもの、存在するもの、造られたものは、破れるもの、壞れるものである。常住のことわりあることなし。如來の壽命は既に捨離せられた。我は三月にして入滅せん。」と訓されたのである。

釋尊が入滅せられて後のことであつたが、「佛壽の捨離」について阿難が諸長老から難詰されたことがあつた。其れに依ると、釋尊は佛であるから生死自由の筈である。必ずや釋尊が、衆生の利益の爲めに今ましばらく生き長らへやうか、或ひは無常の道理を示現する爲めに直ちに入滅しやうか、そのいづれを取るべきかを考へられた筈であり、又御問ひになつた筈である。然るに其時は常侍の阿難が惡魔に心を奪はれて氣附かず、壽命の延長を強く請はなかつたから釋尊が早く入滅さるゝことになつたのである。全く阿難の過失であると言ふのが長老達の非難攻撃の理由であつたが、此に對して阿難は其やうな事は全然氣づかなかつた。全く自分の過失である。自分は釋尊から「三月にして入滅する」と聞いて初めて驚いたのであると言ひ、諸長老に自己の過失を陳謝したのである。此は後日譚であるが、後日譚が生れる程の重大な釋尊の入滅の宣言だつたのである。

釋尊の病氣が全快すると共に雨季も明けたので、阿難に命じてベナレス周邊に安居して居る比丘達を大林の重閣講堂に招集された。これは、雨季が終つたので、比丘達が傳道に出發する爲めの自恣會を催す爲めであつたと考へられるが、同時に亦、病後の心境と遺教を弟子達に告げんが爲めであつた。

「然れば弟子達よ、我は法を悟り、佛となつて法を説いた。其法とは四念處乃至八聖道である。此は衆生を利益する爲めのもの、衆生の幸福の爲めのもの、世間を愛する爲めのもの、人天を利益し幸福にするものである。此法を修し習ひ宣布するのが汝達のつとめ

である、いざ比丘達よ、我は今汝達につげる。諸行は無常である放逸をいましめて精進せよ、我はこれより三ヶ月にして入滅せん」

この遺教を聞いた時の弟子達の表情は經典には全然記されていない。餘りにも唐突で、感情の働きが止まつてしまつたのか、或ひは淡々たる釋尊の態度にまぎらはされた爲に重大事に氣付かなかつたのかも知れない。免も角比丘達は平靜に聞き入つたらしいが、然し此の後三月目に文字通り釋尊が入滅され時には此の弟子達はただ、「餘りにも早く入滅し給へり」と言ふ一語だけを繰返し、碎かれた岩の如く打倒れ婉轉して泣きつゞけたと記されるが、恐らく思ひ及ばざる驚きは餘りにも大きすぎて、三月にしてやうやく悲しみの感情として現れたのであらう

重大な遺教を宣した釋尊は今後の餘命三箇月をも傳道に生かさんとして、ベナレスに一日托鉢して直ちにクシナガラの方へ旅立たれたのである。

三、最後の供養

ベナレスを出發された釋尊は、五つの村で滞在し説法して、三ヶ月の終りに近づく頃にパーワの町に到着し、淮陀と言ふ人の森に住して講筵を張られたのである。自分の森に釋尊を迎へた淮陀は、其喜びを現はさうとして一日釋尊に食供養をなさんことを願ひ許しを得たのである。然し此の供養が、釋尊の命を奪ふ最後の病氣の原因となつたのである。

淮陀が釋尊に供したものは、猪肉であつたとも茸であつたとも言はれて、今日と雖も定説を得ないのであるが、いづれにしても淮陀は苦心に苦心を重ねた珍味を供養し、釋尊に對する感謝の意を表はさんとしたのである。然し、珍味を受けられた釋尊は「此珍味はたゞ佛陀だけが受け得るものである。我が弟子にも供してはならないし、他の家人にも與へてはならぬ。我が食ひ残したものは穴に埋めねばならぬ」と命ぜられたのである。恐らく釋尊は、其食に毒性のあるを感じ、類の他に及ばないやうにと心せられたのである。

淮陀の供養を得られてから、「赤き血の迸り下痢する」病氣となり給ふた。恐らく赤痢であつたのであらう。然し予定の傳道をなさんとする爲めか、直ちに病軀をおしてクシナガラに向つて出發されたが、烈しい下痢は極度に渴を覺えさせ疲勞を呼んで、幾度か路上に上衣を四重に敷いて休み阿難に水を求められた。阿難は幾度か清水の入手し難きに悩んだが、或る時は五百の車が通過して濁つた河へ水を汲みに行くと、不思議や水澄み清くなつて、釋尊の渴を醫するを得たとされる。阿難の苦心も亦た大きかつた様である。

丁度かゝる折しも未羅族出身の福貴と言ふ者が通りかゝつた。路邊の一樹の下で坐する釋尊の靜思寂定の姿を見て尊崇し、恐らくは病狀の重大なることをも感じ、金色の一對の衣を献上して、釋尊と阿難に衣更へを請ふたのである。釋尊は此の申出を受けてそれに報ゆるに法話を以つてせられたが、阿難は其金色の絹衣をすぐ釋尊に著けた。其時に、釋尊の肉身は光輝を發し、衣のつやも失はれた如くであつたと言はれる。然し此衣が釋尊の著せられた最後のものと

なつたのである。

脚俱多河に到着された。渴に悩んだ釋尊に待望の清流だつたので沐浴し、飲水して元氣を取戻して菴羅と言ふ村迄行き其處で一時休息されることゝなつた。菴羅の休息で釋尊は准陀を思ひ出された。若し自分が、今の病氣で入滅するならば、弟子達や世人は、毒食を厭じた者として准陀を非難するであらうし、又准陀自身も釋尊の死の原因は自分にあるとして後悔するであらうと案じられたのである。其處で阿難に對して、准陀は如來に最後の食を厭じたもので其功德は大であること、其食で病を得たとしてもそれは准陀の責任ではないこと、如來は自身の壽を終へて行くものなることを述べ、准陀に後悔なきやうになし、弟子にうらみを生ぜざる様にすべきを説き給ふた。此を説き終ると共に釋尊は又立ち上つて最後の地となつたクシナガラの娑羅林へ最後の歩みを以つて入られたのである。

四、最後の夜

釋尊はついに最後の臥床を求められた。頭を北に向け右脇を床につけ、左足を右足に重ねて、獅子の臥せる如くに臥し給ふたのである。クシナガラ近くを傳道中の弟子達も集つて來て、「世尊入滅」の氣配は濃くなつて來た。此時はまだ娑羅樹の花咲く時ではなかつたが、臥床をはさむ一雙の樹だけが花をつけ、天上からは花の雨が降りそゞぎ、聖者の臨終をさがめる音樂がひびいて來た。天地人共に異變を感じて來たのである。

阿難は年少から釋尊の下に來て育ち、廿五年間を常侍したのであ

る。釋尊の臨終を、人間的感情で最も深く悲んだのは阿難であつたが、釋尊も亦た最後の時期に最も多く阿難を訓された。彼に對して「放逸するなかれ」、「たゞつとめよ」等の親近の語が幾度か繰返へされたのである。

夜になつて、釋尊が當地で入滅されることが町に知らされたので、土地の貴族達が最後の尊崇歸依を捧げに來た。又、須跋陀と言ふ他宗の修行者も、何とかして釋尊の生前の語を受けたいと馳せつけたが是も間に合ひ、光榮ある最後の現前歸依者となり得た。

夜半寂然として聲なく、天地の動きが一とき止んだ時に佛陀の臨終はあつた。釋尊佛陀の最後の言葉は阿難に對しては「我が説きし法と律こそ、我が滅後の汝等の大師である」、他の弟子達に對しては「諸行は無常である。怠ることなく努めよ」であつた。

二月十五日が釋尊御入滅の日である。入滅を涅槃と言ふのであるが、其意味は有限を滅して永遠に生きると言ふことである。釋尊が八十年有限の肉體を捨て、永遠不滅の法身を得られたこと、即ち肉體で現前し給ふ佛陀から、眞理としてすべてのものゝ中に生き給ふ佛陀となられたのが釋尊の涅槃である。

佛陀の遺骸はクシナガラの城門の前で、王者の禮で大葬にされた。そして遺骨(舍利)は、印度の八大種族に八分されて、八つの地方で佛塔を立て、尊崇されることゝなつた。

「浄土」有縁の人々 (三)

藤井實應

(十二月二日) 夜、長野縣下諏訪町慈雲寺(臨濟宗妙心寺派)に泊る。住職宇佐美一雄師は、多治見虎溪山にて島田菊僊老師(現、南禪管長)の下で多年修行、花園臨濟學院出身、若年でこの大寺に住職となられた秀才、住職以來すでに五年、着々として新しい寺院の經營法に着手せられ、青壯年の教化、兒童の宗教々育等の面に活躍せられている。上諏訪の山崎良順師の紹介で此寺に講演に参つたのが、確か昭和二十三年の晩秋であつた、以來數回此寺によせて頂いた。けふは有志の人の座談會にて、上諏訪からは丸山忠重君(鐵道教習所出身)が早くから來て、住職や住職の姉上、下諏訪の小林君らと共に待つていて下さつた。時間には減多におくれたこととな

い私であるが、今日は飯田線の途中で失敗して一電車おくれた爲一時間半ほど豫定よりおくれたのであつた。それは中部天龍驛から鐵道教習所出身の小林新平君が、いろ／＼身邊のことで相談したいというので乗車、車中いろ／＼と話を聞き、自分も意見をのべたりして話に夢中になつていた。電車が天龍峽驛に着いて長く停車しているので、便所にゆく爲下車したところ、まだ便所へゆかぬ間に電車が發車して了つた。オヤ!と氣ついた時はすでにおそい、遂にその驛で自分だけとり残されて一時間余、次の電車を待たねばならなかつた。幸に小林君が前の電車に同席だつたので私の荷物も下してくれ、次驛で待つていてくれたので助かつた。小林君とは岡谷驛まで

同車したが、話している間に決意するところあり、非常に心が明るく軽くなつたとよろこんでくれた。そんなわけでおくれたと申しわけしている間に、諏訪の名物、ワカサギ(小魚)の天ブラうどんの御馳走が出されて會する人達と共に頂く。話は世間話も信仰の話も次々へとばつむ。若い女性の方々も参加、しかし話題の中心は信仰と日常生活のことであつた。商賣をやつてゐる時に動く心もち、親切にと心がけながらも、余りに忙しい時、疲れた時には思はず不親切な言葉や態度となる。こうした自らの心の動きをしらべてたえず修練を心がける小林君の話、まことに自らの心の動きを自ら見てゆくことは大切である。南無阿彌陀佛を主人として、種々の煩惱や様々の出來事を客人として處してゆく、念々彌陀佛の心もちなど語る。丸山君は鐵道教習所に勉強していた時佛教青年會の幹事としてよくお世話をしてくれた人。建築科を勉強したが、行政整理等の關係から、線路の仕事をしている。不遇といえは不遇であるが、業務は生命なりの佛教信仰を以て懸命に精進している。ほんものになれば、人はそのまゝほつてはおらぬものである。

念佛と禪の話も出る。念佛と禪、他力と自

力、道が異なるようであるが、同じく釋尊の教である。遂には同じ高嶺の月を見るであらう。それぞれ有縁の一行を選んで、その一筋道を精進することである。他を排する要はない、他を尊重しつゝ自らの一行を勵むことである。そこに佛教の同入和合が實現される。今日なほ宗派にとらはれて、日本の佛教だけでも大同團結しての活動が不充分なのは残念である。

諏訪の冬の夜は寒いのだが、おコタツにあたりながら話していると、寒さも時間も忘れてしまふ。一往、會を閉ぢてから十二時頃迄住職と語る。

(十二月三日) 上田市、花岡數幸氏へ。今日天氣晴朗、信濃の空は特にすみきつて美しい。花岡氏へ泊ること幾度であらうか、佛縁世縁共に深い。昭和四年火災にあい店を全焼し、妻子が焼死せられるという不幸に際會せられたのが大きな動機となつて眞劍な求道となり、それより毎朝檀那寺なる呈蓮寺(横内淨音師)に參つて念佛すること一時間余、のちに線香を焚いてはお墓に參られる、春風秋雨二十餘年、旅行の時を除いては休まれることはない。この頃は早朝起床、床上に座禪し(村上馨山氏の紹介で釋大眉老師について參

禪もせられた)、六時頃に店を出て呈蓮寺へ、

念佛一時間ばかり、ラヂオ體操をやつてからお墓に參り、それから若干時間習字をしたり或は住職や朝夜念佛會の人々と共に佛教書の輪讀して八時迄に歸宅して朝食、店の業務に従事せられる。これが殆ど日課となりてゐる。「お忙しいによくも毎朝お參りで」と人がたづねると、「これが楽しみで參らずには居れぬ」と返事をせられる。他から見れば忙しい身を毎朝の念佛に相當時間を費すことは相當苦行のように見られるであらうが、それを實踐し不斷相續せられている御本人にはそれが楽しみであり、それによつて淨められ、生活がととのえられる、健康にもよい、その淨められた心で商賣の方も精が出るというわけである。「私のような生活をしているものはいつ死んでもそれは天壽であるから、その時にはそう思うて悲しむなよ」と自らもそう思ひ、家の者にもいひ聞かせているといわれる。お店の様子を見ていると千客萬來、活氣が溢れている。この前には六月十日に參つたが半年振でその後のこといろ／＼と語りあう。夕食を一家の人々と共に頂き、食後は娘さんがレコードをかけて下さつて共々にひと時を樂しんだ。花岡爲雄氏夫妻、太田武夫氏夫妻にも

あつた。

(十月四日) 朝六時に花岡氏と共に呈蓮寺の朝起念佛會へ。横内師はじめ、長年の朝起念佛會の同人、横關衛三氏らと共に念佛、體操墓參、終つてからオコタツにあたりながら、横内師の圓熟された御人格に接してあたゝかい雲團氣の中にいろ／＼と語る。横内師は宗教大學卒業以來三十餘年、社會事業に専念せられ明照會の創立者として各方面から尊崇されてゐる徳者であられる。小林睦男氏にはじめてあう。その純眞な性格と熱心な求道心にふれて長年の友達の感がする。次回、上田に來た時は泊めて頂く約束をする。呈蓮寺で朝食を頂く。

一旦花岡氏のお宅へ歸つて、それから近くの太田武夫君夫妻をたづねる。午前中和やかにその後のことこれからのこと、生活と信仰のことなど語りあつて、晝食を頂きお心のこもつたお土産も頂く。十二時三十分上田發前橋へ。

前橋の福田謹四郎先生宅に泊る。福田先生は前に岡崎高師校長をしておられた時、娘が教えて頂いた、また名古屋鐵道教習所講師として勤務していた時、先生も講師をしておられ、毎日往還の途、話合つてゐた大先輩であ

る。話のうまがあうというのか、私は先生と話合うことが好きであり、先生も私を愛して就職のことまでいろ／＼とお世話下さつたことがある。私は佛教にいう「縁」ということの不可思議さをしみじみ思う、袖すれあうも他生の縁、一樹の蔭、一河の流れという諺の如く、縁を重んじ、お互を同朋としてなつかしみあうこの思想は、世智辛い世の中に明るさとあたたかさをもたらしめるものであると思う。鐵道教習所にて數ある教官講師の中に、こうしてそこをやめて後も親しく文通し語りあう人は極く少い。今、福田先生を訪ね泊めて頂くのも深き縁あればこそとよろこばれるお分れしてから三年目である。話は盡きない殊に先生は座談の名手、白水の如くに豊富な内容あるお話が次々へとあふれ出てくる。しかし話題の中心は教育である。廣島文理大初期の出身であられるから關西、大阪方面の教育界に進出する草分け時代の話も承つた。結婚、家庭、信仰の問題から、襖紙を張る秘訣、根根にする植樹のことにも及び種々教へられること甚だ多い。

(十二月五日) 前橋より東京への途、熊谷驛にて同驛勤務の古茂田清一君に停車時間だけ語る。かねて通知してをいたのですぐ分る、

東京鐵道教習所出身である。卒業してからすでに十年にもなる。今はすでに一人の子の親となりてをられる。今日までも先生として慕うてくれる有難さ、私の書いた「佛教とは何か」の本を差上げる。彼は私に御土産のお菓子をくれた。僅か一二分の話で再會を約して汽車の出るまゝに惜しき別れをする。

午後早々より台東區谷中清水町の宮澤胤勇様お宅の信仰の集ひに、御主人は忙しくてお目にかゝれなかつた。奥さんは十數年前上諏訪の有隣莊にて處女會への講話に參つてからの御縁、戦前には麻布專稱寺の毎月の念佛會によくお参り下さつた、終戦後はお宅で殆ど隔月に集ひが催されている。奥さんの友人茅ヶ崎の山田文子夫人はいつも出席されるが、娘さんが御病氣の爲に缺席、伊藤かう子さんも自身病氣の爲に缺席、病氣で臥しながら平素頂いたみ教によつて、念佛の中に樂な心もちで養生しているとの御傳言。近隣の人々數人が集まれ、最初に光明禮拜儀の一部を共にとなえ、念佛一會してから、三身(法、報、應)のお話をする。後に質疑應答の信仰座談こちらでははじめお話だけであつたが、念佛の實踐をとまなわなければ眞實の信は得難いとの趣旨も領せられて本年の始め頃から木魚

も用意され、椎尾増上寺法主の名號の前に念佛を稱えてからお話することになった。聞の一つで信心獲得を説く眞宗流では力がつかぬ。念佛の信と行を具足してこそ、活きた如来の光明に觸れうるのである。

座談會を了つてから、世田谷三軒茶屋島崎醫院へ、院長島崎君枝さんは産婦人科の先生昭和二十一年十二月末に家を買つて殆ど獨力でこの病院を建設されたという。彫刻家錦戸新さんの導きによつて觀音信仰に生き、患者さんを拜む心で接し、病人に仕える心で對し仕事を生命なりと精進せられている。本年(昭和二十六年)七八月の候、奥澤九品佛にて淨土宗律師養成講座の時、九品佛の觀音堂によく參拜せられ、ある日、錦戸新氏と共に、九品佛に來訪、語りあつたのが佛縁となり、これで二度御たづねする。錦戸氏も來られた。錦戸氏は高村高雲さんの高弟、只今は日展へ出される身長七尺の不動尊製作中である。毎朝三時頃に起床して約一時間半佛間に於て不動尊の經を讀誦し、身心を淨めてから製作にとりかゝられるという、去る十月には氏のアトリエを訪ねてその製作品も見せて頂いた。不動尊はまだその製作中で眞裸體のまゝで土でつくられすでに百五十貫ほどになつていた

涅槃圖の寢釋迦



小島 章 見

日本の古寺では二月十五日に涅槃像を安置し、或は涅槃圖をかけて、香花 糕餅等

を供養し、遺教經を讀誦して、遠く印度に於ける佛陀の死の忌日を懷古し、報恩の誠をさげることゝ忘れない。日本では涅槃常樂の一句からとつた常樂會が、天平神護の奈良時代に興福寺にて修せられ、以後この式を改めて古くからこれを涅槃會と云ひ、支那では梁陳時代から娑羅會と稱し、重要な佛教行事として修法されてきた。又バーミヤンには古代千餘尺の涅槃像が造られ、無遮大會が修法されたことが、七世紀の支那唐代に輩出した玄奘といふ僧の大唐西域記に記されている。

二月やこも一まいの涅槃像

この俳句は、行誡上人が、明治二十一年の春二月、知恩院に

病みしとき、上人自ら筆をとり老僧の菰をかつぎて寢居る様を畫き、その上に賛をし給ひしとき句である。さすが一世を風靡した高僧であられたから、既に靜かにせまり來る自己の死に對しては一切生死の繫縛を超へた心境で、また雜阿含經第十八に説く如く、貪欲ながく盡き、

瞋恚ながく盡き、愚癡ながく盡きた、自力聖道の斷惑證理の涅槃の眞理に、將さに即入せんとせられた姿を、吟句なさつたのであらうか。はたまた、我こそは一毫も未だ煩惱を斷ぜざる凡夫、飾らざる凡夫、涅槃につきては不斷煩惱こそ淨土宗独自の教であるから、煩惱具足の凡夫その盡にて、自己の理性によらず、唯阿彌陀佛の本願によつて、淨土に往生することができ、而も淨土と云ふ清淨なる徳に依つて、煩惱を超えて、涅槃を證得するところとができる安心の姿を、吟句したものであらうか。勿論、行誡上人なれば、斷惑證理の諸宗共通の教にはよらず、佛の願力に依る淨土宗本來の念佛三昧、思ひ患うなき涅槃常樂の

其の姿を、其の盡吟句されたものと私は之を解釋したい。

さて、涅槃圖像は、お釋迦様のなくなられたのを弟子達が悲しんでいる光景である。

佛陀が娑羅雙樹の間に、頭北面西右脅の姿勢で牀上に横臥し、阿難、須跋陀羅、阿菟羅陀末羅種族の王及び鳥獸等の五十二衆がこれに圍んで、互ひに佛陀の入滅を悲しみ、限りなく慟哭している構圖である。俗にこの涅槃圖像を二月の寢釋迦とも云ふ。

遺形佛教美術時代に於ては佛陀は全て象徴的に現はされ、未だ人間的形姿で以つて造像的に表現されなかつた。随つてこの時代に佛陀の涅槃を意味する佛教美術の作例は單に卒都婆でもつて表現されたのである。これに反して像形佛教美術時代は、佛陀を表現するの

チーの佛像や、更に中央亞細亞、西藏、支那朝鮮、日本等の所謂大乘佛教美術の佛像が作られた時代である。涅槃圖像も又この時代に於て涅槃圖像として造像的に影響せられた。元來、涅槃圖像は

- (1) ルンビニー園の佛降誕圖
- (2) 出城出家の圖
- (3) ブダガヤの佛陀成道圖
- (4) 佛陀の降兜率天圖
- (5) ベナレスの鹿野園の初轉法輪圖
- (6) タシナガラの佛入涅槃圖

等一連のもとに佛陀の一生涯を説明する佛教美術における佛傳藝術として作られ、涅槃圖像は佛傳藝術の内でも重要な最後の一コマであり、決して涅槃圖像だけを單獨に切りはなすと、この藝術の眞意は成り立たなかつたのである。それ故最初から涅槃會のために考案された圖像様式ではもととなかつたのである。斯る印度の佛傳藝術は主として、卒都婆の腰羽目に淨彫せられ、そして佛教遺蹟を巡禮する佛教徒に對して親切に佛陀の一生涯の出來事を觀察する對象として、佛教徒の慰藉を滿たしたものであつたのである。

日本に於ける涅槃像のうち、和銅四年に作られた大和法隆寺の五重塔内の北面、塔基

にある國寶の塑造釋迦涅槃像は我國において最も古い涅槃像の例である。所謂五重塔は古代印度の佛舍利をおさめた卒都婆に相當し、その腰羽目に當る塔基に涅槃像を始め、佛傳圖像を配置した様式は、ガンダーラや、マツラの塔の基壇に浮彫された佛傳藝術の配置法と少しも違はず、同じ意義のもので、法隆寺の涅槃像の配置方法が如何に佛教美術史上印度の古典的形式を踏襲したものであるかを窺ふことができる。これに反して藤原時代の傑作と謂はれている金剛峯寺所藏の絹本國寶涅槃繪圖は非常に日本的趣味を濃厚にたゞよはせており、更に日本獨特の涅槃圖像として、室町時代頃から流行した木版畫による下繪に彩畫をほどこした涅槃繪像がある。これこそ涅槃會に使用されるために作られたもので、田舎じみた佛教信仰と、庶民的佛教美術の香をたゞよはせて、なかなか樂しめるものである。

佛教美術圖像學上から涅槃圖像の會衆について考察すると、佛陀の入滅を悲しんでいる弟子達の會衆數について、ガンダーラや、マトラの古典的佛教美術に於ては、僅に横臥せる佛陀の前後に、須跋陀羅、或は阿難と稱される一比丘形と俗人即ち佛教信仰に改宗した

佛陀の最後に立會つたところの末羅種族の王五人を現はしたもののや、或はそれの左右に、金剛手、加葉を加へ、末羅種族の王のうちの一人が阿菟陀になつて都合八人の會衆を現はした極く少數の會衆であつたものが、後世になると涅槃經說に依據してその會衆の數を増し五十二衆にまで増加せられるに至つたのである。近世徳川時代の涅槃圖像に至つてはその五十二會衆を丹念に畫き、遂に兆殿司筆と稱される京都東福寺の涅槃圖像などは猶までその會衆に描き入れられることになり、奇觀を呈し、全く藝術的價值を失つてしまつてゐる。一方これは封建的形式主義の江戸時代文化の影響とも謂へよう。

我々は、二月ともなれば、梅、わびすけの花をめ、十五日には涅槃圖像を安じ、昔藤原時代に、戒弁上人が四十八日の不斷念佛を勤行した様な氣持を、現代世相が雜然とすればする程、亂れば亂る程、猶今日に持ちたいと思ふ。私は古くから爲された日本人のこうした願ひを、少しも古いこととは思はない。私は二月十五日の日本の落日の風景の中に坐つて、落日の夕陽に照された寂光土に、靜かに生き、生かされていきゆく、いのちの尊さを、しみじみと思ふのである。

徳本行者(二)

服部英淳

大安心の境地

こんな話もある。徳本が鷺洲寮に留錫していた頃、高崎の藩士で寺田五右衛門という剣道の達人があつた。徳本の名聲を聞いて十念を乞い、深く歸依していた。その門人に白井亭という人があつて、後には並びなき達人と稱せられた。この人が諸國を武者修行して歸つた時、師の寺田は殊の外不興げに、

「汝の修行は未熟じや。魂がはいつて居らぬ」と叱りつけた。そして、

「良き高僧を尋ねて見よ」

と教えた。今の世に高僧といえ、かねて聞く徳本より外にないと考えた白井、丁度そのころ勝尾寺にいた徳本を訪れた。

「拙者は諸國修行の武藝者で御座る。師範寺田の勧めによつて、はるばる尋ねて参つた者。剣法の奥義について御存じ寄りをお教

え願いまする」

徳本はたゞ微笑して、

「わしは念佛の行者で、武藝のことは知り申さぬ。知つてゐるのは、念佛して極樂参りすることだけじや。そなたも後世のために念佛されたがよい」

といふながら、もう鉦をたゞいて念佛を始めた。そのうしろ姿をつくづく見ていた白井は

「これこそ正しく剣法の妙處」

と豁然として悟つた。たゞ一握りの撞木を持つ徳本の體には、毛ほどの隙さえなく、千萬人といえども驚かぬ大磐石の態であつた。大安心の境界というべきであらうか。

江戸

紀州須ヶ谷の草庵を出てから、早くも十數年の月日が流れた。紀州公は那加郡の和佐山に庵室を作つて歸國をうながし、國內の化益を托した。

しかし、文化文政といえ、徳川も末期で、爛熟した華やかな世相の中に、道義は頽廢し、僧風はすたれ、人々は心のともしびを求め

ていた。こんな時、徳本はまこと尊い存在であつた。江戸増上寺の典海大僧上は、鸛洲とはかつて徳本を江戸に招いた。

この度こそはと、名残をおしむ人々に別れて、和佐山の庵を發つたのは、文化十一年の春であつた。まず大和の當麻寺、河内の太子廟、奈良の興福院などに詣で、三たび勝尾寺の草庵に別行を修した。京都圓通寺では、先帝後桃園天皇や仙洞御所の女房達を得度し、かくして東海道を教化の旅をつけ、再び江戸に入つた。その道筋には、到る所、十念を乞う男女が溢れて、乗物の通れないようなことさえしばしばだつた。傳通院では山内に常念佛堂を建て、迎えた。

「お念佛は御飯のようなもの。これを頂けば腹がふくれると思ひ定めるのが安心、箸を取つて食べるのが起行じや。三度々々頂く御飯と同様、命ある限り一生申しつゞけるのが念佛じや。これを飯の安心起行の御利益と申す。たゞし、食事は日々の飢を治して五十年百年の命を助け、念佛は永劫の重病を治して無量の壽命を、たもつものじや。」

法話の初めには必ず一枚起請文を読み、そしてこんな平易な話をしながら、たゞ一枚起請文を説くのが常だつた。

又ある人が、煩惱を退治する法を尋ねた。徳本は次のような連歌を作つた。

上人。煩惱よ我は出家をする程に、いんで下んせ何處へなりとも。

煩惱。坊さんよ無始より已來つれ添ひて、今更いねとは何が不足ぞ。

浄土トラクト

B五半截・十六頁
價 七圓 送八圓

藤井 實應 一枚起請文

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い信仰とで指示せる必讀の書

浄土シリーズ

文庫版 四頁(價)二圓
百部以上一・八圓 三百部以上一・五圓(送料)五十部毎八圓

大野 法道 五重の話

(二月初旬刊)

竹中 信常 お 彼岸

()

藤田 寛雅 お 十夜

前田 龍海 參詣手帖

(お塔婆・お墓・位牌・お珠數・法事)

煩惱。坊さんよ私を見捨て、出離して、その行末は何となるぞよ。

上人。煩惱よ何も案ずることはない、安樂世界へ我は行くなり。

煩惱。坊さんよ安樂世界があるならば、連れて行かんせわし諸共に。

上人。煩惱よ嘆くをむりと思はねど、連れ行くことは今は叶はぬ。

煩惱。坊さんよ我身はすいたこといふて、見捨てられたる心憎いぞ。

上人。煩惱よ無理なることを云ふものぞ、一生つれ添ふ約束はせず。

煩惱。坊さんよ此世はおろか未來まで、わしは連れ添ふ思ひなりしに。

上人。煩惱よいへばいふ程つけあがる、只うち捨てゝあみだ佛々。煩惱。是程にいへど口説けど見捨てられ、とても連添ふことはたえく。

上人。うちやりてあみだ佛々唱ふれば、恐れながらも泣寝入りする。

一行院

傳通院の念佛堂には、善男善女が群れ集つた。一橋、水戸などの諸侯からの招きも多かつたが、一箇所に留るのも本意でなかつた。

江戸に入つた翌年には、再び行脚の草鞋をはいた。この度は伊豆相模を巡り、信濃の善光寺、戸隠山に詣で、諏訪唐澤山に彈誓の行跡をしのび、飛彈、越中を経て越後を最後に江戸に歸つた。各地で日課念佛を勧め、名號塔を建て、結縁の人々はおびたゞしい數にのぼつた。

文化十四年六十歳、漸く老齡を加え、信者への應接にも何となく疲れをおぼえた。再び勝尾寺へ歸りたいと思つた。一橋公は増上寺大僧正とはかり、幕命によつて小石川一行院を改築して捨世の道場と定め、徳本を引きとめた。徳本はやむなくこの寺に留り、武藏一圓を巡錫したりしたが、十五年九月頃には持病の痠疼が悪化し、弟子のために遺言した。

「徳本命終の後、最後に不思議なることあらば、答ていへ。我師

大正大學高等學校(夜間)生徒募集

一、募集人員 第一學年二百名(男女)

第二・三・四學年補欠若干名

一、願書受付 二月一日より試験前日まで

一、試験期日 第一次三月二十三日

第二次四月十三日

入學案内は一〇圓切手封入申込むこと

東京都豊島區西巢鴨四丁目

都電、バス、西巢鴨下車

四歳の時より念佛して、南無阿彌陀佛と申て、息をとゞまりをはんぬ。別に不思議ということなし。然るに徳本如き凡夫の往生を遂ること、これをこそ不可思議不可説なりといふべきなれ。」

十月六日には數十年ぶりで床に横わつた。そして硯をとり寄せ

南無阿彌陀佛生死輪廻の根をたゞば

身をも命をもをしむべきかは

としたゝめ、念佛の内に薨爾としてその六十一年の生涯を閉じた。

ゆかり深い攝津から舟で運んだ御影石の五輪塔が、一行院にある。

哲學の小みち

佐藤賢順

舊多十七日に學校長會議があつて一年ぶり

で京都へ行つた。用件を済ませた翌十八日、

午前中、黒谷の塔頭の西往院に戸川靈俊氏を

訪れて、大正大學のことでは是非とも京都在住

の出身者の協力を仰ぐ用があつたのでいろいろ

と懇談した。その序に宗門學界の話、戸川

氏がいま教授をしている大阪の工業大學の話

など出た。京都の冬にありがちな、時々さつ

と時雨がきてはまた陽の光が照るといふ日

であつた。京都の良さはこういう日にあるので

す、時雨も京自慢の一つである。京の時雨

のことは北川桃雄氏も何かに書いていた。

もう一つ午前中に東山高校の石井俊恭君を

尋ねる約束があつたので、南禪寺と永觀堂に

狭まれているその學校へ出向いた。戸川氏が

途中まで送つてくれた。南禪寺から法然院、

銀閣寺あたりの東山添いの道は老松の山を背

負つて、竹林に囲まれた家々のたゞずまい、

築地塀のうねりなどいかにも落着いて、胸の

奥深く染み徹るものがある。「西田さんや田

邊さんがこの道をよく散歩したのです。この

邊を哲學の小みちというのですよ、」と途々、

戸川氏は語つた。大先輩にまねびてこの道を

散歩する若い學徒も多いことであらう。京都

には新しい名所がこうして加えられてゆく。

石井君に會うといきなり「吾寺へ行きまし

よう」と言つたのだけれど、石井君は「大佛

次郎ですか」と映畫「歸郷」と結びつけて、

一向取り合つてくれない。そして近くの南禪

寺の「湯どうふ」へ案内してくれた。南禪寺

の一支院の土塀を入ると、茶庭に面してささ

やかな座敷が鍵の手に設けられてゐる。茶

庭であるが庭はむしろ背面から見る地形にな

る。圍爐裏に土鍋をかけて、底へ敷いた昆布

の上でぐつぐつと踊る豆腐を箸の先で掬い上

げながら、盃を交わしていると、木の芽でん

がく、胡麻豆腐、とろろ芋、菊の葉や椎茸精

進揚げが運ばれてくる。この座敷には電燈が

ない。日が暮れば行燈に灯が入るそうであ

る。いわめる洛趣と傳統を固く守つてゐる所

である。石井君には「淨土」の原稿のこと讀

者のことなどをくれぐれも頼んだ。庭の楚樹

が梢に眞紅の葉數片を残している。紅葉の頃

はさぞ美しかつたであらう。

芝居で演ると、石川五右衛門が、「絶景か

な絶景かな」と手をかざして、京の町一帯を

眺めるあの南禪寺の三門へ上つた頃は、京都

特有の夕靄が一めんに立ちこめて、京の町は

水底の景色のように見えた。歸り途、私は曾

て訪れたことのある金地院の石庭のことを思

ひ出して、石井君を促して、白壁だけが白々

と暮れ残っている大きな庫裡の入口に立つた。小堀遠州の茶室や長谷川等伯の襖繪は、案内の人が電氣をつけてくれたので、辛うじて見る事ができたが、桃山御殿の移築である本堂の内部や襖繪はもう暗くて見えなかつた。遠州作といわれる鶴龜の石庭も夕暗に包まれてはつきりとはわからなかつた。本堂の外縁に立つたまま、石井君は遠州の藝術について語つた。私は遠州の子孫のことを話した。天才遠州は寫實や整形を突き抜けてデフォルマチオンに進んでいる。こゝの茶室でも、障子の棧の間隔がみな違つていて、そこから或る効果をねらつたのである。ピカリだよ、遠州にだつてピカリ的なものがあつたのだよ、やはり同じことになるんだよ、と私達は話し合つた。

京都好きの私には、少し名はキザだが、「哲學の小みち」のそゞろあるきは楽しかつた。丁度その頃、華頂會館では、浄土教團を是非一つにしたいという、これもまた楽しかるべき會議が續けられていた。

本會代理
責任取次

F. F. D. 幻燈機

F. F. D. 株式會社
東京都港区
芝田村三ノ七

..... スライド映寫機 (幻燈機)

- | | | |
|------------------------|-----------|-----------|
| ◎ミナシキ58型B (推薦優秀幻燈機) | ¥ 12,880. | 送料 ¥ 500. |
| ◎マスター S50. B 型 (文部大臣賞) | ¥ 11,880. | ☆ ¥ 500. |

..... スライド (フィルム)

宗 教

- | | |
|-----------------------------|---------|
| ◎玉虫の厨子物語—法隆寺にまつはる愛と藝術の悲しい物語 | ¥ 460 |
| ◎早耳のうさ吉—早耳で得意のうさ吉が早耳の爲大失敗 | ¥ 430 |
| ◎おしやかさまシリーズ—全五巻、釋迦の降誕から一生描く | 各 ¥ 430 |

物 語

- | | |
|--|---------|
| ◎なんにも仙人—なまけものの少年がなんにも仙人にとりつかれたなんでもする働きものになる | ¥ 430 |
| ◎三つのたからもの—貧乏な百姓の息子がたからものをもらつたが其のたからものから大事件がおこる | ¥ 460 |
| ◎ビルマの豎琴(前、後)—文部大臣賞を得たビルマの豎琴のスライド化 | 各 ¥ 430 |
| ◎三太の青大將—N. H. K. 放送三太物語より | ¥ 460 |
| ◎母を尋ねて—母を尋ねて三千里、海越へ山越へ少年マルコの話 | ¥ 430 |
| ◎幸福の王子—寶石と金で作られた幸福の王子が人々を助ける | ¥ 460 |
| ◎白雪姫—美しい白雪姫がさまざまの苦勞が幸せになる | ¥ 430 |

其他—社會、公民、地理、歴史、産業、藝術、理科、保健衛生、文學、宗教、等の作品300種、在庫豊富、目録進呈致します。

私と佛教

ブ リ ン ク リ ー



佛教について何か話すようにとのことですが、私が、始めて東洋思想に接したのは、丁度、第一次世界大戦の眞最中、廿四歳の時でありました。この戦争へ参加した結果、私はツク／＼人生の無常であることを感じ、矛盾の多い此の世の中から、それを取去りたいと考へました。

然し、その爲には、私がそれまで信じて來た、唯物論に基く、人生觀や世界觀では、到底、解決が出来ないことに氣付いた次第であります。

そこで、今までの人生觀を見直すことを自覺致しました、が、さて、それには既成の思想や宗教ではとても駄目らしい。そこで友人に此の事を相談致しました。

私は彼にすすめられてシネット (Synectics) という英國人の書いた、「神秘佛教」 (Mystic Buddhism) を讀みました。此の本は北方佛教の根本原理を解釋している概論ですが、この本が發行された時、ヨーロッパの思想界に大きな動搖を與へたものです。

始めて讀んだ私も、非常に強い感銘を受けて、この本に書いてある思想の線を辿つてゆけば、自分の煩悶も解決出来るのではあるまいかと、かう思いました。

ここから研究し始めて、やがて、印度の思想が流れ出た源である、ウパニシアドの古典的な部分の概論に至り、續いて、印度哲學から南方佛教、つまり、小乗佛教という段階を経て、遂に、日本の大乘佛教研究を志すに至つたのであります。

これ等の研究をするうちに、私の心は次第に、釋尊の偉大さに、打たれ釋尊をしたう様になりました。

先づ、釋尊は、如何なる場合でも、あの偉大な人格を傷けるようなことがなく、物事を判斷するのにも、非常に冷靜であつて、他人に怒りの色をみせることなど、決してなかつたのは、實に、他の宗教の創設者と異なる、深い印象をもつた方であります。第二に、釋尊は、人間の運命は、その人自身の力で、完全に開拓出来ることを教え、示しております。

この世の事に關する限りは、理性によつて解決し得るといふのです。しかし、釋尊は「人間の意識の働きの一つと見られる」感情とか情操とかを、決して度外視してはおりません。むしろ、これを活かすことによつて、世の中のできをよくするように示され、智と、情と、意の三つを巧みに、用いられているのです。

更に、常に平等で差別待遇をしないという觀念から、「生きとし生けるもの」、草木の一本一本に至るまで、宇宙の一切が、佛になる性質を持つていて、それが、花を開いたか、まだ開かないかの、違いであると教えております。

これが佛教の特色の一つで、釋尊が、我々に與へられた教義は、「一人よがりの獨斷論ではなく」、人の心を揺り動かす本當の教訓であり、しかも、それを採用しようが、しまいが、我々の自由で、少しも、強制的な處がないことも、深味のある点であると思ひます。

ここからして、佛教の教理が、世界に、大きな影響を與えたのを、見逃してはなりません。

それに就て、有名なエツチ・デー・ウエルズは、(H. G. Wells) 斯様にいつております。

「世界歴史を繙いてみると、すぐれた人物は多いが、その中で、最も、すぐれたものは釋尊である。彼の遺した影響は、偉大なる宗教改革を導いたのみでなく、文化方面にも社會方面にも、更に、進歩的な影響を示している。彼は世界で、數えられる十二人の大人物中でも、最高の人である。」

實に、その通りで、これについて、一例をあげてみますと、印度の社會には、最も忌むべき封建的な四姓制度、即ち、社會的階級別の制度がありますが、釋尊は、これを一掃したのであります。

釋尊が、苦業に疲れた身を、清められた時、乞食より以下の取扱ひを受けている、賤民と呼ばれる階級の娘から牛乳をうけて飲まれた。

御承知の通り、釋尊はその國の王子です。階級別のひどい時代に、釋尊が身を以て示された、このことは、階級打破の民主主義の始めであります。また、佛教の感化を受けた印度には、印度人の誇りとするに足る、純印度式のサンランたる四つの文化が現われております。

これは印度に限らず支那でもそうです。佛教思想が支那に傳えられたのは、西歷六十八年のことですが、その後に至つて、唐の文化、宋の文化というように藝術、美術、教育などの各方面に、世界的な價值のあるものが、産み出されております。これは實に、佛教思想のオカゲであるように思はれます。

日本でも欽明天皇のみ代に、佛教が傳つて以來、今日に至るまで、かず／＼の文化的な

功績をあげております。御承知でしょうが、獨乙の有名な哲學者ニーチェは、宗教に對して、あらゆる方面から、痛烈な批評をしますが、佛教に對してだけは、禮讃の辭を贈つております。

例えば、釋尊が、神をいたゞかずに、宗教的な、哲學の力で、あれほどの人生觀をきずきあげ、また、その力によつて、社會的な進歩を促したが、斯様なことは、釋尊を除いて他には誰もいないであろうという如くであります。

私は、大東亞戰爭の時、印度のデリーにあつた、英軍總司令部で、滿二ヶ年の間、軍務についておりました。

最初、印度行きの命令を受諾した理由は、釋尊の生れた國を、一度は是非とも、訪れたいと考へていたからでした。

さて行つてみますと、成程、印度という國は、ものの變化が大變遅い國で、佛教の經典に出てくるような、釋尊時代の風俗習慣が、まだ澤山残つています。だが、一方からいえば、大變、藝術的な味の、濃厚な點も多いのです。

私は毎朝早く、食事をする前に、散歩をするのですが、印度にいた時もその通り。散歩

を日課の一つとしていました。

その途中、小高い丘などに登つて、眺めておりますと、田舎から野菜を賣りにくる人々が、男女、色彩とりどりの服装で、荷物をつんだ駱駝やロバを曳きながら、行列を作つて來る有様や、印度人のキャラバンが沙漠を進む景色などは、全く、一幅の繪畫そのままです。

ところが、近寄つてみると、何れも嗅氣ブソブン、今までの楽しい氣持も一ペんに消え果てて、全く、幻滅の悲哀を感じます。

しかし孔雀とか、その他の美しい小鳥たちが、餌を拾う様子などは、藝術がそのまま生きて、動いている感じです。

「花は紅、柳は綠」といつた點が、熱帯地方だけに、あざやかに浮出しています。

餘談に流れましたが、今日、印度では、佛教の感化によつて活動しております。

その爲めに、又もや、階級別の惡制度が横行し始めて、下層階級の人々は、實に氣の毒な状態に在ります。その上、教育制度が普及しない爲に、住民の大多數は無智な人々が多いのであります。

そんな状態にも拘らず「その人々の中に行はれている人生觀が、一種の哲學的な味をもつてゐるのは面白い現象だと思ひます。」一

來、印度という國は、極端から極端がある國です。貧乏人と金持ちとの差が著しく、また智識才能の點でも天と地との開きがあります。文字などは一字も讀めないで、全く何にも知らない人がいるかと思うと、智識人の中には、世界でも有數な學者が大勢いて、その頭腦のすばらしさは、驚くばかりです。

こんな點からも、釋尊が、すぐれた型に屬していて、その上に、天才的な方であつたことも察せられます。今日、印度は再び、獨立國家となりましたが、これを更に、以前のような、世界でも重要な國家とするのは、どうしても、現在の社會的矛盾を改良すべきであります。

それには、賤民の階級から立上つた、あの有名なアンベデカ博士の言われる如く、印度を釋尊當時のフンイキに生きる佛教の國家にひき戻さなければなりません。

私もそれと同じ考えでありますが、さて、翻つて日本を眺めてみることに致しましたよう。

日本の大乘佛教は、その形態も、原始佛教と比べれば餘程變化をしております。

然し、これは、外側だけで、その内側の教えや、理論の根本に、それ程の變化があるべ

き譯はございません。

先日、印度からおいでになつた、アトリヤ博士のお話の如く、「ヒンズー教も佛教も、同じ源で、その大本は、印度のウパニシアドから出ている」のであります。斯様に、兩方の思想とも、別れ／＼に、異つた方向へ流れ出てはいるものの、ヒンズー教の最高目的たるヴェダンタも、佛教の最後のネライである般若波羅密多も、共に、「最高の智」を指していて、何れも同一であることは、まことに、古人の歌の通りであります。

分けのぼる 龍の道は ことなれど

おなじ高嶺の 月ぞながむる

佛教は印度や支那に於て、大文化の建設をとげたように、日本に傳來してから、一番大きな功績は聖德太子の思想に及ぼした感化力でありましょう。

これに依つて、日本が、世界に一流を、誇りうる、文化國家の一つに、仲間入りが出來たので、あの奈良朝文化を、最も純粹な日本精神の發露であると批評する人もありますが私は疑いもなく、佛教を土臺とした文化であると信じております。

又それから數年をへて平安朝の初期には、天臺眞言中心の文化が、日本の歴史を飾つて

をります。實際上、聖德太子の時代から、平安朝の初期までは、佛教中心の文化であり、新鮮味のあるものの中に潑刺とした氣分の美しさを持つております。

その後、鎌倉時代に至つて、佛教は、更に新しい生命を得て、そこに華開いたものは、禪と淨土系統が大きな役割を演じている文化でありました。

それ以後、各時代／＼の日本文化は、鎌倉室町、桃山、安土、江戸など、何れも、多分に佛教思想の影響をうけていたことは否定できません。

徳川時代に至つて、佛教は、幕府の政策から、遂に墮落勝ちになりました。

それでもなお、白隠禪師や天海大僧正のような傑僧が排出しました。下つて明治時代になると佛教排斥の聲が漸く高くなり、歴史上有名な排佛毀釋の誤れる迫害によつて、佛教は冬の夕日の如く影のうすいものとなつてしまいました。しかし佛教は依然として生きつゝいたのです、それは佛教がまことのものを持つてゐる證據であります。

今日、佛教界は再び目覺めたる人々によつて、活潑な復興運動が始められつゝあります。

私のみるところでは、從來の寺院の在り方では正しい佛教も影をひそめてゐるよう思われます。

例え、それが残つてゐるとしても或る一部にすぎず、僧侶もまた、本當の佛教的生活に生きてゐる人は、少いではありませんまいか。佛教が、いわゆる葬式佛教に下落したのは、徳川以後の佛教に下落したのは、徳川以後の佛教家に誤れる人が多かつたのであり、これを、救うには佛教の再認識が必要でしょう。佛教には、我々が俗にいう死などはありません。

「そこに死と稱するものは、我々が疲れて夜ねむる様なもので、一種の長い睡眠と見做してもよく、あの世で一休みして、又、この世に生れ變り、再び活動をつゞけて、遂に、覺りを得るまで努力するというように説くのがくだいた佛教の教えであります。

正しい教が、いつの間にか混亂して、葬式佛教になつて了つた事を深く反省して正しい道にもどらなければなりません。

正しい意味を失つた寺院の本堂は、正しい法を伝えるべき處ではなくなり。寺も僧も世間の人々も、釋尊の理想、釋尊の正しい教えに歸るべきであります。

正しい教え、正法の動く處に、我々の日常生活がいきいきと活動するので、その中心となるのが僧であり、寺であり、本堂であるべきであります。

私から考えると、一般には、正法の空氣は茶道の座敷に、こもつてゐる様に思われます。形式のみに、流れない正しい日本の茶道は、禪の精神から出發したいわば、禪の藝術とも云い得るもので、「和敬靜寂」の理想こそ、佛教と、ピッタリ一致してゐるのではないでしようか。

茶の席は、あの書畫骨董の、微妙な美しさと共に、靜中に動ありで一沫のゆるみもありません。

佛教はまた、他の藝術等にも滲み込んで、具體的にみられます。

例えば、簡潔で、しかも、深い意味をもつ俳諧、幻妙な尺八、幽幻な「お能」など、何れも、佛教そのものの味を示しています。

さて、今日、やゝともすれば、世界平和をお題目としてゐるような傾向があります。

勿論、これは結構なことには違ひありません。然し、口だけでは事實上、どれ程の效果があるでしようか。

若し世界平和を實現するのなら、第一に、

我々は先づ、日常生活のイロ／＼な矛盾を一掃してゆくべきです。

それには、個人／＼の教養を高めてこそ始めて出来るのであります。

むろん、環境の改良は、必要ですが、まず人間の心の、入れ換えが必要なのです。

つまり、人格の向上を、第一義とすべきで学校教育を始めとして、家庭の不和をなくするなど、一人／＼が高い人格を持ち、従つて心に大きな愛、佛教の慈悲をもつようにすれば、人種的差別や、階級斗争などは無く、隣人愛が、大きく輝いてくるのであります。その具體的方針としては、「ものを愛し、ものを活かす」ことの實踐、佛教でいう不殺生戒を守ることにあります。

この戒は、言うことは易しいが、實行はなみだいていのことでは出来ないものです。

法華經の精神のように、森羅萬象悉くを愛し、いたわるから出發して理想世界へ達すべきであります。その一方法として、我々が肉食をやめて、罪なき數百萬の動物の生命を救うことから始めたら、如何でしょうか。

私は、カルカッタ郊外でみた話を申し上げたいと思います。

一つの牧場から、他の場所へ曳かれてゆく

何十頭も／＼の牛の列をよく見かけました。

それが、たゞ、單に移動させる時は、誠に簡單、子供がたつた一人で、細い杖で靜かに牛を追つてゆけば、樂に進めます。ところが屠殺場へ送られる牛の時は大變です。一、二頭に一人つつの大人がついて丸太の様な太い棒で力一杯追いたてて、ゆかなければ動かないのです。牛は殺されるのを豫感しているのか、盛んに逃げようとして、騒ぐ、うめく、果ては涙さえ流してガンバルのです。この有様はまるで地獄のように悲惨であります。

一生の大部分を人間の爲に働いた場合、人間のうちにストライキも起さず、恩給も貰わず、罪もないのに殺されて、しかも人間に食べられて了う。

一體、こんな馬鹿氣たことが許されまじよか。

假に人間と牛との立場を變えて考えてみて下さい。思はず、ゾットするではありませんか、人道主義とか道德とかいう前にもつと考へることが澤山ある筈であります。

人間は自分の楽しみみの爲に獵をして、動物や小鳥を殺したり、平和に眠る犬をいじめたり、夏になると、子供は、蟬やトンボをとつて、虐殺したり、いづれも、殺生戒を犯して

いるうちに、自然と、殘虐な心が養われて、戦争の因を、つくり出すのです。

人間の心の中から、斗争的な要素と、この殘虐性を、取去らなければ、本當の平和世界は現われません。

この、不殺生戒を説かれた、お釋迦様もイロ／＼なこととで、それを教えております。

どの宗教でも、この點は同じですが、他のどんな宗教よりも深味のある佛教の國日本。日本人として誇るべく、且つ、世界にも稀な美しい文化は、すべて、佛教を土台としたもので、その美しさは、不殺生の心の表現であります。

よく佛教は難かしいといいますが、寢轉んでいて、解る程、佛教は深味のないものではありません。

我々は、今後、生きた佛教に體當りをしてこれをつかみ取り、日常生活を完成してゆくべきであります。

こゝに始めて、佛教の眞價、日本の將來も世界平和、いな、一物一草に至るまで、一切の平和の鍵が、あると、信じます。

(V. R. Brinkley 駒澤大學教授、大正大學講師、元英陸軍少佐)

◎いくつになつても正月はよいもの。それだけにまた諸事手につかぬお祭り気分の一ヶ月を終り、さてこれからが今年の勝負。自立日本の眞價を磨き出すべし。

◎御覽の如く本誌もまた滋味と信仰に溢れたものとして、皆様の御期待に添い得たことと思う。

◎近頃同じ佛教誌の中でありながら、その貴重の頁を費ひやし、一年一日の如く淨土教をなみするものがあるが、正信のものを迷はすも甚しい愚。茲に一は彼の非を彈じ、一は公平正明なる佛教の立場から、淨土教を明かされたものが本誌、眞野先生の筆陣となる。從來やゝともすれば、ありきたりの説明でしかなかつた點も、はつきり出ている。淨土信仰の本質も號を追ふ程に次が待たれる。

◎毎號各界に一人づゝぐらいの人を得て、社會の一面に實を結ぶ念佛の花を次々に探ぐりたく、今月

は川田先生を災わした次第である◎會員も堅實にボツボツと増加の峠を登つております。皆様の勸誘のおかげと存じ御禮申し上げます。共にますますの御盡力を懇請致します。

◎終りに私事乍ら、愚生の健康も色々と御心配をおかけしましたがどうやら元に戻りつつあります。

芝園だより

但し當分は、先生方とのおつき合をひるまに限ります。御賢察下さい。(竹中)

◎本誌は宗内に愛される唯一の雜誌たる所に大きな力を持つてゐる。しかしながら宗全體にまだまだ行きわたつていない。どうか隣から隣へと御すすめ願ひます。最近では大阪の成道寺さん、森さん

廣島の金龍寺さん、荒尾市の報恩寺さん等は特にいろ／＼御勸め下さつてゐる。

◎そして皆様の雜誌として、いろ／＼御投稿あらんことを待つ。毎日、事務所に送られる皆様の一寸した言葉ですら、洩れなく拜見しております。

◎宗内もさりながら、内容としては決して宗内誌に満足せず、じりじりと眼を廣く社會に向けて、公論たるを期したいと思う。本年は其點一段と力をいれて編集會議が持たれてゐる。

◎誌代變更しましたから、當方の清算通知御覽の上、なるべく、きつかり半年、又は一年分になるよう送つて下さい。

◎シリーズ近刊の中、五重の話(大野法道著)お彼岸(竹中信常著)は二月初旬に出來上ります。五重のおすゝめと、彼岸施本にせいぜい御利用下さい。(龍海)

維持會員芳名(敬稱略)

小瀧隆定(三重)

誌上厚く御禮申し上げます。

誌代

會費半々年二百圓、一年四百圓(〒共)毎號定價三十圓〒四圓、前金切次第清算通知申し上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿七年一月廿五日印刷
昭和廿七年二月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田錦保町三ノナ

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

電・芝(四三)一三二八
會員會號B一〇八〇一四

大正大學

學生募集

學部

人員 第一學年二百名・第二・三學年若干名
學科 文學部 哲學科(東洋哲學・西洋哲學・
宗教學)

史學科(日本史學)

文學科(國文學・米英文學)

社會科(社會學・社會事業)

佛教學部 佛教學・梵語學・天台學・眞言學・淨土學

試驗 受付 二月一日より三月廿四日まで

期日 三月廿五、廿六日

大學院

人員學科 文學研究科 佛教學攻專 二〇名

宗教學專攻 一〇名

國文學專攻 一〇名

試驗 三月廿五日

入學案内は二〇圓及び八圓切手貼布宛名記入の封筒を同封して申込むこと

東京都豊島區西巢鴨四丁目

都電・バス・西巢鴨下車

店舖新築記念大特賣

在家用

一、佛壇佛具 一式

正札の一割引特賣

寺院用

一、佛具 一式

御相談下さい市價の凡そ二割安にて奉仕いたします

一、墓籍簿 二百枚綴(百基分) 五〇〇

過去帳、寄附帳 百枚綴 上、四〇〇

並、三五〇

當座過去帳(中陰帖) 百枚綴 二〇〇

東京都江東區深川三好町一ノ五

長專院内(區役所前)

正本堂佛具店